

第二期 第六十七号 (二版) (無料)

音信不通

本のビオトップ

2022. 02. 20 定有堂書店 発行

読書のバイアス

奈良 敏行

発熱便り

ワクサカソウヘイ

数を数えている日記

鳥居 貴彦

汽水のほとりから (11)

小原 修治

サーブをめぐる冒険

萩原 俊郎

震災をめぐる

松田 裕史

こどもって? ~ 変わる記号と不変量

芝野 浩貴

キキメがない話

ムラカミヒロミ

鳥取あれこれ その六十六

内田 克彦

八代日記 (二十三)

齊藤 仁昭

鱒二追想

秦阜 梅林

ホールケーキにて

森本 龍哉

一緒にいたいような、いたくないような

三浦 永理

巻きものの冬

ドラマリア

編集後記



読書のバイアス

奈良 敏行

(定有堂 店主)

バイアスというのは偏りのことだ。街角の小さな本屋という場所で考えているので、偏り傾向が強くなる。人の個性と本屋の個性が、読書のバイアスという面で重なり合う。驚きのない読書はおもしろくない。これもバイアスなのだ、逆に言うとバイアスのない本屋はおもしろくないのではないだろうか。驚きというのは、こうだと思っていたがじつはこうだった、というところに生成する。でも一方で生死事大だとも思う。実存に触れてこない読書は無意味な気がしないだろうか。

読者の方に向かって選書しても売れない時代が長い。売れないと逆に自由が生まれる。バランスの中に売れるきっかけは失われ、バイアスの中に共感購入という余地が生じる。門外漢だが最近量子力学に驚きを見出している。独学者なので本屋トークの端々にバイアスが露出するよううで、同情して下さったのか、「読む会」選者の岩田先生が、数ヶ

月先のテキストに、奇書を指定してくれた。『仏教は宇宙をどう見たか』だ。工学部で科学哲学を学び、のち仏教学者になったひとの著書だ。「空」観は目に見えているものへの懐疑に始まる。結果、現象でなく「極微」で考える。同様な量子力学では原子のレベルで考える。読む会で他人の意見が聞けるのが楽しみだ。

「独学」というのは好きな言葉だ。関心が狭いので、よいなことには関わりたくないからだ。この狭さのありようを説明すると、「知る」ことに、わたしのオブセッション（やむにやまれぬこと）があるのだ。そして狭さとアブダクション（仮設的推論）は一つこと。説明のつきにくい現象に出合ったとき、なんとか秩序立った理路を見出したいと願う。そして性急な心の中にバイアスが生じてくる。

説明のつきにくいこととは何だろう。個人的に好きな言葉がある。「必ずや滅び去るべき生物体のなかに、滅びることを肯（がえん）じない心が生まれ、しかも心自体がそれを知ってしまった」。木下清一郎『心の起源』の中で見つけた数行だ。わたしのオブセッションのアイコンのような一言だ。

そこには滅びるのが嫌だ、という心の叫びがある。乱読を重ねていたある日アブダクション的な「解」に出合った。「滅びること」と「滅びに気づく」という二項の因果律を

切断すればいいという知解だ。その時はちょうど『正法眼蔵入門』（頼住光子）を読んでいた。「われわれ自身のとらわれている基準を相対化すること」への教えと要約できる。「生も一時のくらみなり、死も一時のくらみなり」という。薪が燃えて灰となる。この因果律を切断すれば、薪（生）と灰（死）が別個にあるだけだ。切断を効果的にするためには、「極微」なあり方であればいっそうたくさんの切断点ができる。つまり時間（因果）が無くなる。基準の相対化が完成する。

結論は因果律を切断するということだ。ところで確証バイアスという言葉もある。結論を見出すと、同一の発見をくり返したがるという心の習慣だ。

例を挙げると次のような本を読んでいる。『世界はありのままに見ることができない』、『時間は存在しない』、『動物と人間の世界認識』、『マルチバース宇宙論入門』、『意識と本質』、『人間以後』の哲学』、『DNAに魂はあるか』、『身体化された心』など。いずれも「極微」の世界観だ。現象が「情報」として理解される。『世界はありのままに見ることができない』の世界観は「時空はインターフェースのデスクトップ画面であり、物体はそのアイコンである」、ドットは素粒子であると語る。アブダクション的にわかりやすいが本当だろうか。

一人のアクション的な話だが、本屋なので、そのまま本屋のバイアスとなつて棚の一角を占有している。こんな読書のバイアスに興味ありませんか。

2022. 01' 25

- 佐々木閑 『仏教は宇宙をどう見たか』 化学同人 2021
木下清一郎 『心の起源』 中央公論新社 2002
頼住光子 『正法眼蔵入門』 角川ソフィア文庫 2014
ドナルド・ホフマン 『世界はありのままに見ることができない』 青土社 2020
カルロ・ロヴェツリ 『時間は存在しない』 NHK出版 2019
日高敏隆 『動物と人間の世界認識』 ちくま文庫 2007
野村泰紀 『マルチバース宇宙論入門』 星海社新書 2017
井筒俊彦 『意識と本質』 岩波文庫 1991
篠原雅武 『「人間以後」の哲学』 講談社選書メチエ 2020
フランシス・クリック 『DNAに魂はあるか』 講談社 1995
フランシスコ・J. ヴァレーラ他 『身体化された心』 工作舎 2001

定有堂教室「読む会」 (岩田直樹氏 選書)

毎月一回 火曜日 詳細は店内掲示

太極拳教室(会場 定有堂二階 葉香クラブ(荷葉))

毎週 水曜 十九時半から ・土曜 十三時半から

講師 日本武術太極拳連盟 四段 公認A級指導員

発熱便り

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

いま、発熱中である。布団の中、スマホのメモ機能を指で手繰りながらこれを書いている。というわけで、連載中の「齢三十八の伏線回収」はお休みにして、発熱中の感慨について綴っていきたい。

発熱は2年ぶりだ。40℃も出た。明日検査に行くが、まあコロナかインフルエンザか風邪のどれかだろう。当たり前だが。

コロナが最上位になってしまっている世の中だが、普通にインフルエンザの可能性もあるわけだし、有象無象の風邪である場合だってある。風邪というものの正体や有効な治療法自体、ほとんど判明していないわけだから、なんにしても弱ったものである。余談だが、エイズと水虫と風邪、この三つのうち、どれかひとつでも特効薬が作れたらノーベル医学生理学賞を獲れるらしいです。

倦怠感と悪心がぬるつとした感じで全身を包んでいるが、それ以外の症状はほとんどない。咳もなく、頭痛や関節痛も感じない。明日、近くの病院まで一応検査に行くのだが、私みたいな個人事業主にとってその検査の大きな意義とはマネーのためだったりするわけで、なんだかやるせない。そもそも発熱しようがしまいが一ヶ月は家にこもっているつもりだったのだ。自分が陰性だろうが陽性だろうが生活にはなにひとつ支障はないはずなのだが、それでも先々の納税金回収（支援金のことを私はこう呼ぶ）を考えると、検査をしておいた方が都合が良い。

で、まずは都がやっている発熱相談センターに電話したのだが、そこでこんなことを言われた。

「病院に行く際は検査は自分からは希望しないでください」

なんでも検査を自分からお願いすると、自費負担になるかららしい。そして医者判断で「検査しましょう」となった場合には、保険適用となるとのこと。

これはつまり、好きな相手に自分から告白するのではなく、気を持たせるような態度を続けて向こうから「付き合ってください」と言わせる、魔性の作戦である。

果たして私に、そんなしなを作ることができるのであるうか。乞うご期待である。

と、ここで終わらせてもよかったのだが、もう少しだけ。いま、バタバタと周りの知人友人たちも発熱している。で、みんな Twitter など「陽性となりました」と報告している。

私の友人たちは舞台や芸能関係が多いので、まあ報告したほうが色々と事がスムーズにいくのだろうけど、やっぱり病気になることそのものに罪はないし、なにより私たちは普段からずつとなにかの病気であったりするのだ。だから、こういうパンデミックの折に、病気に対する悪性のイントネーションが余計に深くならなければいいな、ということだけは危惧しているし、自分はあるべく病気と軽く向き合うことで世の流れにバランスを取っていききたいと思っている。

とは言え、この世には「病んでいる」という現象は確実に存在する。これは体調というよりも、精神的なことを指す。まあ、精神的に病んでいる人は、体調も低迷していることがほとんどなのだが。心身とは常に一体であるのだから。

自分が仕事の場面などで、どうしても癖を振る舞いたくなる時、「ごめんね、病気なんだ」と言ったりする。そうすると、ちよつと場が軽くなる。「病気」という言葉も、タイミングによっては使いようである。

なにごとにも基本的には調子いいことに越したことはない。病気じゃないほうが、そりゃ色々と得だし楽である。それでも私たちは病気になる。たぶん、ほとんどの人が最期は病気で死ぬ。それが常である。その常を、なるべく暗澹のない目線で眺め、できれば笑い飛ばしていきたいと思っている。結局、作家のできることなんて、それくらいしかないのではないか、なんて思ったりするのだ。

こないだ、脳のMRIを撮ったら、腫瘍がふたつ見つかった。良性なので心配いらぬらしいが、半年に一度は検査に通わなくてはならないらしい。

右脳と左脳、それぞれのおでこ側に付着した双子の腫瘍。輪切りの写真を見たら、隠れミッキーのようだった。

数を数えている日記

鳥居 貴彦

(開風社 待賢ブックセンター)

「本は儲からへんのだ」とKさんが言った。五十年本屋をやつてきてそのほとんどを経営者として関わっていた人がいふのだからもう何もいうことはない。本屋は儲からないのだから。結論は出ている。終わり。それでも毎日レジを閉める時にはしつこく小さな数字を数えている。

小さい店をやつているということは、儲からなくてもいいということではない。儲けたくないわけでもない。お金は必要。なぜなら私は生きてるので。一日の売り上げをメモするときには感情を挟まないようにしている。「想定できる一番下のラインを考えて、それでもやつていけるかどうか」と往来堂書店のOさんがぼそつと教えてくれたのだ。

はもう四年前だろうか。今はその一番下のラインよりもさらに下にいる。一桁か二桁くらい下に。

「きゆうばんさんばんばす」と三歳児がつぶやいている。その横を市バスの九三系統が通り過ぎていく。向こうから二〇四系統がやつてきた。あれは？と聞くと「にばんまるばんよんばんばす！」と大きな声が返つてきた。まあ当たつてるか。車道側歩いたらあかんよ。

数字はどう読んだつて数字だ。あんまり意味はない。「あのこの保育園も休園になってるんやつて」という会話も、「京都で百の保育園幼稚園が閉園しています」というニュースになると突然色を失つてしまうのはなぜなんだ。「今日は二千人の陽性者が発表されました」よりも「あのあの人……」の方がインパクトがある。

大きな数字はよくわからない。刷り部数十万部突破！というには一冊の本を売らなければ始まらない。一から十万までのどこに関わりたいかと聞かれたら二か三くらいのところになりたい。そんな聞かれることないけどね。

Sさんが大きなため息をついている。どしたんと聞く

と「元氣な女子たち……」と呟いてどこかに歩き去った。大人数でできやつきやと盛り上れるのはうらやましいね。でも会話は三人くらいが限界なんじゃないかと思う。四人を超えると難しい。四人以上の飲み会ではスイッチを切ってしまう。自分の中のなにかのスイッチ。

久しぶりにイオンの中の大きい本屋に行く。絵本売り場の三分の一くらいはぬいぐるみや靴下が並んでいた。雑貨や文具は儲けが大きいという。コーヒーを出せば利益率はものすごいらしい。ギャラリーや貸し棚があると経営が楽になるんやって、小西さんが言ってた。みんないろんなことをやっている。それでも本屋だからえらい。飲食の方が利幅が大きいからといって急に定食屋に業態を変えた本屋をぼくは知らない。時期が来ると選挙事務所になる本屋なら知っている。「昔パチプロやってたんすよ」と話す文芸書担当の書店員もひとり知っている。あと不動産で儲けようとしている取次のごとも知っている。本屋はどうにかして本屋であり続けようとしている、ように見える。どれだけ薄利でも本を置く。それって誰のためなんだろう。みんな誰のために店やってたんの？

昔パチプロやってた書店員Iさんは、パチンコ屋の開店

を待つ時間に本を読んでいたらしい。スマホなどない時代、時間があれば本だった。結果、今は本屋に勤めている。同僚に「あの人の脳内半分アルコールに浸ってる」とか言われながら東京駅の目の前でせつせと働いていた。休日には降りたことのない駅に降りて、駅前のコンビニでチューハイを買い、ちびちびと飲みながら歩いていくそう。缶が空になったらまたコンビニを探し、酔った頭でひたすら歩く。「気づいたら完全に迷子になってやばいっす」と笑いながら話していた。なにその話、こわ、と思っ

た。

汽水のほとりから (11)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

年が明けて間もなくコロナ感染症の第六波が到来した。

一月下旬には、一日の全国感染者数は第五波のピーク時をあっさり抜いて過去最高の五万人台を記録するに至った。流行のオミクロン株は重症化率が低いと言われているが、重症者も全国で五百人近くにのぼっている。政府は人命が最優先だとしているが、一方では疲弊した経済をこれ以上止めるなどという声にも耳を傾けざるを得ない状況にある。一年前、当時の菅政権はワクチンが決め手だと言いつつ、接種が順調に進めば、普通の生活を取り戻すことができ、経済活動も再開できると高をくくっていたようだったが、絵に描いた餅だった。見通しは完全に甘かったのである。人命か経済か。コロナ禍は我々にジレンマを突き付けたが、実はこれは今に始まったことではないと考えられる。むしろコロナ禍はこのジレンマが昔から存在したこと、またその背後に「人命よりも経済が優先されている」という

最悪の事態が生じていたにもかかわらず、その問題に長らく耳目を塞いできたことを、改めて我々に突き付けたのである。コロナ禍になることで社会全体が「経済よりも人命が優先されている」という状態を目指すべきであり、政府も国を挙げてそのことに取り組む姿勢を見せていたが、長年問題に向き合ってきた来なかった付けが回ったのか、コロナ予算として7兆円もの巨費を投じてもお本当に困っている人へ経済的支援は行き届かなかったのである。

先日、NHKテレの番組「ズームバック×オチアイ」を視た。番組ホストでメディア・アーティストの落合陽一と台湾デジタル担当相のオードリータンが、オンラインで「誰一人取り残さないために」をテーマに対談していた。

筑波大の落合陽一研究室では、障碍者を補助する発明品を次々と発表し、最新テクノロジーと福祉とを掛け合わせて新たなモノ作りを行なっている。一方、オードリータンも、AIとは Assisive (補助する) Intelligence (知性) であるべきとのコンセプトから、その技術を活かした感染対策を実施しており、二人はお互いの仕事を評価し合っていた。

特に興味深かったのは、最近よく耳にするようになったダイバーシティ(多様性)およびインクルーシブ(包摂)について両者ともに現状批判的な見解を示していた点だ。特にSDGの条文でもよく使われている後者の語に対し、

「インクルーシブという言葉で囲われた内側に入らないものが必ず存在する」と落合陽一が言い、オードリータンもそれを受けて「未来に生まれてくる子ども、動物や植物、山や川などの自然、政治的経済的な何らかの理由で意思が表明できない人々など、発言権が与えられていない存在も取り残さないのが真のインクルーシブだ」と応じていた。

オードリータンが言うように、これまで我々の社会では権利を主張できない人やモノを取り残し、犠牲にすることにより、物質的な豊かさを独占的に享受してきた。言わば、現代中心主義・人間中心主義・マジョリティー中心主義によつて我々は自分たちに都合の良い状況だけをひたすら追求してきたのだ。が、そのベクトルの先にあるものこそ、やがて環境破壊を引き起こすことになる「自然よりも経済が優先されている」という問題であり、先に述べた「人命よりも経済が優先されている」という問題であったのだ。そんなことは無いと反論する人の為に具体例を挙げよう。

例えば、原発。原発の稼働は経済問題である。十年前の東日本大震災でメルトダウンした福島第一原発の電力は、巨大都市東京を支えていた。光輝く美しい夜景を見ながら我々はその電力を供給している原発に想いを馳せ、そこで日雇い労働の人々が危険な仕事をさせられている事実には真剣に向き合うべきだったのだ。報道写真家の樋口健二は『闇

に消される原発被曝者「増補新版」』（八月書館）でそのことを告発した。これに衝撃を受けたミュージシャンの寺尾紗穂は「原発の日雇いで放射能で被曝したおじさんが／虫けらみたいに弱るのを／都会の夜は黙殺する。／私は知らない／人を救う術を」（「何も知らない」と歌い、インタビュ―集『原発労働者』（講談社新書）を刊行した。

日雇い労働者は今も昔も社会的に最も弱い立場にある。そうした人の命を危険に曝さなければ回らない経済とは一体何なのだろうか。弱者や少数者が当事者であれば無いことのできた「人命よりも経済が優先されている」という問題が、コロナ禍で不特定多数の人々が当事者になることにより改めて否定された。が、喉元過ぎれば熱さ忘れるのとわざ通り、それもそう長くは続かないのではないかと危惧する。ちょうど大震災から十年経て我々が原発を再び稼働させようとしているように。本当にそれでいいのか。折しも、島根原発の再稼働の是非をめぐる住民投票条例の制定を米子市と境港市の市民団体が住民の署名を集めて市にそれぞれ請求したという報道が連日飛び込んで来た。

当に村上春樹を読んでいるんですか？ 軽蔑します」とボコボコに叱られたからだ。

ことほどさように「ハルキスト」と呼ばれる彼のファンは熱烈で、結束力も強く（ノーベル文学賞の発表前夜の集会）、日刊ゲンダイによるとその数は推定百万人、自民党員並みにいるらしいので、下手なことをしゃべると、どこから石が飛んでくるか分からないのだ。

ところが、かく言う私も、かつては初期の村上作品（『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』『羊をめぐる冒険』）を繰り返し読み、特に短編集や彼が翻訳したレイモンド・カーヴァーは耽読した。少しバタ臭いが、シンプルで乾いた文体に「ようやく自分たちの時代の書き手が現れた」とまで感じた。

昭和の匂いをする村上龍や田中康夫ではだめだった。経済だけでなく生活や音楽や文学もやがて「欧米」と同化する…ビートルズをロザさみ、『風の歌…』に出てくるフィアットの中古を手に入れたら、なれはしないか。実際、サブを買った。映画の旧型ではなく、GMの傘下に入っからものだが。



「村上春樹」はあの時代のアイコンであり、ファッション・アイテムであり、そのうちブランドになった。やがて

訪れたバブル景気で、彼の小説のように若者でも車が買え、空騒ぎのパーティーと、洗練された服や音楽を楽しむ暮らしが当たり前になった。そしてバブル絶頂期、若者がこぞつてあの赤と緑の本を持ち歩くようになったあたりから、村上の長編はつまらなくなった。深読みが求められる、難解でこじつけ的なタイトルと物語。手に取ることも少なくなった。

ところで数年前、彼の文体を借りた「井村上春樹で語る育児」というタグがツイッターで盛り上がったのをご存知だろうか。秀逸な作品を一つ。

「『それで』。妻は言った。『どうしてあなたは寝かしつけもせず際限なくあの子と歌っていたのかしら』。『それは見解の相違さ』。僕は控えめに言葉を紡いだ。彼女にとつてこれはすでに弾劾裁判なのだ。『僕だつて知らなかったよ。夕食後に一緒に歌うだけで興奮して眠らないなんて』」。

見事である、そして笑える。今や子育て中のフツーのパパママが「村上春樹になれる」「村上春樹で遊べる」のだ。それはそれで楽しいし、一種、時代の到達点でもある。ぜひご照覧あれ、小説より面白いから。

震災めぐって

松田 裕史

(高校教員)

二〇一一年三月一日に東日本大震災が起こってからもうすぐ十一年になる。震災について時間をかけて綿密に探究したことはないが、間欠泉ように何かのきっかけで考えてみようと思うこともある。リアルな関りとしては、福島から自主避難してきた生徒の担任をしたことがある。郡山中の卒業式の後、震災にあったそうだ。家で暖が取れているかどうか、そんなことを聞いたのは後にも先にもその生徒に対してだけである。自主避難の方の生活はつまり、そういうことである。

震災直後には詩人の和合亮一が『現代詩手帖』にすぐさま発表した「詩の礫」を読んだ。清岳ここの『マグニチュード9・0』も読んでいてひりひりとした感触に飲み込まれた。佐伯一麦の『空にみずうみ』は声高に失われたものを嘆くのではなく、日常、特に自然との対峙の中でささやかだけれど手ごたえのある命の感触を小説の言葉で表象しえ

ていた。

つい最近、積読状態になっていた村上春樹の『神のこどもたちはみな踊る』を今更ながら読んだ。「ドライブ・マイ・カー」を再読した勢いで何となく読み始めたのだ。阪神・淡路大震災後に書かれ、初出から二十年以上経っているが、古さを全く感じさせない。作品の中で何度か「神戸」という地名が出てくることから阪神・淡路大震災がテーマだと分かるが、「神戸」を「福島」に変換すればこの作品は東日本大震災をテーマとしたものとなる。つまり、阪神・淡路大震災で露わになった、あるいは村上春樹が短編集であぶりだした日本の課題がほとんど解決されずに東日本大震災を迎えしまったということの意味する。

短編集は「UFOが釧路に降りる」から始まる。この短編の最後に「でも、まだ始まったばかりなのよ」というセリフがある。震災は何かの終わりではなく、始まりということなのだろう。阪神・淡路／東日本大震災後に表出してきた社会の綻びは実は震災前から存在した。しかし、大多数はそれに気づかなかったか、見えていたが傍観していたかのどちらかである。「アイロンのある風景」の終盤では、順子の涙は止まらない。

「ほんとに何も無いんだよ」と彼女はすいぶんあとになっ

てかすれた声で言った。

「きれいにからっぽなんだ」

このあたりの村上節は日本以外の先進国の若者に村上春樹が読まれる所以だろう。表題作の「神の子どもたちはみな踊る」では、主人公の「僕」（善也）は自問する。

僕はいったいこのこと、何を求めていたのだろうか？ 歩を運びながら善也は自分に問いかけた。僕は自分が今、ここにあることの繋がりのようなものを確かめようとしていたのだろうか？

自問の後、善也は覚醒したかのように踊る。踊りながらも自らの中の闇も直視する。

彼は地面を踏み、優雅に腕をまわした。ひとつの動きが次の動きを呼び、更に次の動きへと自律的につながっていた。…中略…そこには深い闇の不吉な底鳴りがあり、欲望を運ぶ人知れぬ暗流があり、ぬるぬるとした虫たちの蠢きがあり、都市を瓦礫の山に変えてしまう地震の巣がある。

「タイランド」では「堅固なはずの地面や岩が、まるで液体のようにぐにぐにやぐにやぐとなつてしまう。」とあるように、つるつるとした日常の裏側にあるものをさつきは見ようとすると。「蜂蜜バイ」ではそれまでのモチーフが繰り返される。

その巨大で致命的な災害は、彼の生活の様相を静かに、しかし足もとから変化させてしまったようだった。淳平はこれまでになく深い孤絶を感じた。根というものが無いのだ、と彼は思った。

物語の後半では、ここで終わらず「二人の女を護らなくてはならない」という覚悟を淳平は語る。

安易な答えが提示されることはない。しかし、物語によって希望を創り出そうとする意志は確かに感じられるし、胎動しつつある希望を読みながら感じた。善也が踊る場面などはまさに圧巻。長編『ダンス・ダンス・ダンス』が思い出される。

震災はまだ終わっていない。終わったことにしてもいけない。復興も道半ばだ。しかし、まだ、僕たちは踊ることができる、と信じている。

「子ども」って？ ～変わる記号と不変量～

芝野 浩貴

(地球探家)

「子供」を「子ども」にしたかと思えば、「子ども庁」が「子ども家庭庁」に変更されて物議を醸した。幼保一元化ができないのは縦割り行政だけのせいではないにしても、子供と家庭の一元化には異を唱える。結婚観も「ヘテロ」から「ホモ」へ広がり、各種文書でも性別の欄が削られつつある。映画賞も「男優賞・女優賞」から「俳優賞」への流れ。区別と差別。「ジプシー」から「ロマ」に変わりどくなつたか。ユダヤ人差別とは別にロマの子供たちを誘拐してロマ文化撲滅をめざした国はどうなつたか。

〈部活指導力〉をアップさせるには、その競技のトップの人の動きを追えばよい……ので追ってきた。〈教科力〉を磨くにはその専門のトップの人の内容を追えばよい……ので追ってきた。

しかし、〈担任力〉を磨くにはどうすればいいのか？よかったのか？ 抽象的で明文化しにくいことではある。私

なりの答えは、ずっと担任をすることと、誰の前でも話せる力をつけることであつた。陰日向なく話すとはどういうことか、10年以上通り続けた「全国同和教育研究協議会」も途中で名称を「全国人権・同和教育研究大会」と変えた。「人権」という包摂された名の下に「部落差別学習」から学ぶ土着の間そのものへの眼差しが失われてこないの心配してきた。2008年以降戸籍制度を廃止した韓国はどうなつたか、中国・台湾とは趣旨を異にする世界でも稀有な戸籍制度を日本が維持することの意味は？

8050問題は9060問題に移行し、高齢社会問題は持続する。「看護婦」が「看護師」と名称を変えてどうなつたか。家族主義が危ない。パートナーを「嫁」、「奥さん」、「女房」、「家内」と呼んできたことの検証。自分の親だから、自分の子供だから、自分が親だから、自分が子供だから、長男だから、女の子だから……と言つて、〈個人〉が家を背負つたり捨てたりするのをやめよう。〈個人〉に特別な子育てとして囲い込ませるのをやめよう。「沈没家族」を観てから3年が経とうとしている。当事者の加納土さんの話も直接伺つた。父親は何人いてもよい。産みの親と育ての親がいてよい。鹿児島島の長島が舞台の映画「夕陽のあと」では、「ぶりはみんなでぶりを育てるので、周り

のみんなが親だ。さらに、ぶりはみんな海から産まれるので、海が母親だ」と話す主人公の豊和(とわ)君の台詞が真理をついていた。

〈次世代の宝である子どもは誰かの所有物ではない。みんなで育てるものだ〉

これを漸化式の例で説明する。ある時間 n における薬の効果度を W_n とし、その効果が半減した時(その周期を t とする)は、 2 ユニット追加すれば効果度が保てるモデルがあるとする。 $W(n+t) = 1/2 W(n) + 2$ と書ける。前の状態の半分に 2 を足すと次の状態になるというモデルを、高校生は特性方程式 $\alpha = 1/2 \alpha + 2$ を解くことで、 $W(n) = \alpha$ が等比数列になることを用い $W(n)$ を求める。今の例では $\alpha = 4$ となり、 4 が不動点となる。専門的に書くと、拡大縮小と平行移動の合成は、不動点を中心とする回転拡大に変換できる。時間の概念を導入すると、 α を起点とすると、ビッグバンからの物語となり、 α を収束点、無限遠点だと捉えると宇宙終焉へのストーリーとなる。カルロ・ロヴェッツリによると「時間は存在しない」から「世界は関係でできている」だけだとなるのかもしれない。数学的思考のひとつに *invariant*(不変量)への着目がある。圏論的には、ホモトピー同型に対して、ホモロジー群は不変量となり、その概念は「組合せ位相幾何」から「代数的位相幾何」へ拡張

させた。オイラーの多面体定理($V-E+F=2$)もオイラー標数が不変量であることの例である。

「障害」から「障がい」への問題を考える時に、「他者」から「他人」への回帰、抽象から具体への提言がなされる一方で、密室から公開へ、共有への一般性も説かれる。責任から構造へと誘い、この矛盾を定立させるのが〈不変量〉だと私は考える。「仮想通貨」が「暗号資産」に変わり、貨幣の役割をぼかそうとしているが、子どもは通貨でも資産でもない。70年前の以下の絵本も〈不変量〉だと思う。

ケストナーの動物会議

1. 国境をなくす、見張りをなくす
2. 軍隊・銃・爆弾なくす
3. 警察は弓矢で武装して、殺人科学を研究しない
4. 役所は人間のためにあるので、役所と書類だんすの数は最小限にへらす
5. 子どもを本当の人間に教育する任務は一番重い任務なので、教育者の役人にはいい待遇をする。真の教育の目的は悪いことをたらだら続ける心を許さないこと

キキメがない話

ムラカミヒロミ

(ライティング・ブックマン)

例えば、あなたが古い全集を揃えたいと思ったとする。古書店の揃いはバカ高い。そこで、安く上げるために、一冊づつバラで買い揃えることにした。最初の内は、平均単価より安く買えるので、してやったり、と喜ぶが、やがて壁に突き当たる。最後の一冊が、どうしても見つからない。稀に、オークションに出ると、青天井。そんな巻がある。

古本漁りをしていると、段々に分かってくるが、全集や叢書などの揃いものには、手に入りにくい、仮にあっても妙に値の張る巻というのがある。業界用語で「キキメ」という。「効き目」なのか「利き目」なのか、「目利き」がひっくり返って隠語化しているのか、よくは知らない。

例えば、『ブルースト全集』がある。全十八巻・別巻一という構成である。最初の十三巻あたりまではバカ安であ

る。『失われた時を求めて』である。文庫で、複数の訳本が出回っている。半世紀前の稀覯感は最早ない。一冊千円以下である。宜なる哉である。ところが、それ以降の、評論や書簡の巻になると途端に跳ね上がる。別巻に至っては、揃価格の半値くらい行く。

全集というのは、大抵、売れる巻から配本が始まる。そして、人気のない評論とか、評伝とか、資料編といった巻は最後の最後になる。配本も遅れがちである。初回配本から二十年後に漸く最終配本された、なんて例もある。(『筑摩世界文学大系』の詩集の巻、講談社『世界文学全集』の文学史の巻など) 遂に出なかつた例もある。(『ホフマン全集』の評伝の巻など)

大体、全集もシリーズものも、後の方になると購読者の根気が続かなくなり、売れ行きが落ち、当然の帰結として刷り部数も減減していく。定価は高くなる。流通量が減るのだから、古書市場への還流も減るのは道理。需給のバランスで、ダブついたものは安く、稀少なものは高額となる。

角川文庫の横溝正史シリーズは九十冊を超える長大なもので、マニアに人気がある。

これは、揃いで市場に出ることは少なく、出ても価格や各種の理由（後述する）で、おいそれと手が出せない。

勢い、一冊ずつ揃えて行くしかなく、それはそれで楽しいもので、当初は、新古書店を丹念に回れば七〇八割方が揃う。しかし、その先が正念場。人形佐七ものや、映画のシナリオ、小林信彦が丁寧にまとめた『横溝正史読本』あたりがキキメになる。

さらに面倒な材料は、異装本が極めて多いこと。カドカワ映画以前の、初期の巻は、通称「白背」と呼ばれ（カバールの色が白ベース）、なかなか出回らない。装画も、後の写真調とは異なり、抽象風のデザインで垢抜けている。

一番初めに刊行された『八つ墓村』に至っては、画家も違って（河野通泰）、稀覯中の稀覯。文庫でありながら「万」の値が付く。

かてて加えて、角川文庫は昭和五十年代の終り頃から本体自体のデザインを変えており、初版と重版では違うものが出てくる。消費税の導入に伴い、価格表示が変わってくる。特に背表紙下部の表記が「¥」付の明朝から、丸ゴシックに変わり、見た目の印象が相当に違う。カバールの紙質も変わる。この上、帯に拘り始めたなら泥沼である。フェア帯

は論外にしても（ただし、フェア時に初版が出るケースがある）、映画化、ドラマ化の際に帯が付く。同じ映画に複数の帯、ということもあり、これらを全て究めようとする、さて、世の中には、刷違いを全部集めようという御仁もあるのだが…。

文庫、というレーベルの中でも、見つかりにくいタイトルが間々出てくる。新社になる前の中公文庫など、ノンフィクション部門は宝の山だったが、軒並み高額古書の殿堂入り。レーベル自体が消えた旺文社文庫や福武文庫も、海外文学が充実していて、今、これらを探そうとすると難渋する。河出文庫にしても、ダンセイニなど早くも入手不能で古書価も莫迦にならない。創元推理文庫も旧・帆船マーク系を筆頭に、初版が売切れたらそれまで、というアイテムが多く、要注意。ちくま文庫や学芸文庫、学術文庫なども出た先から稀覯化していくような所があり、油断できない。要は、出た時買いたいということだ。次の機会は無い、と思っただ方がいい。

鳥取あれこれ その六十六

田 公 土 佐 守 殿

内 田 克 彦

(地域研究家)

即ち、この文書は、山名久通と対立していた但馬山名の山名宗詮〔祐豊〕が、かつて久通方であった中村伊豆守を褒めるとともに、豊定〔宗詮の実弟〕の因幡への派遣を予告しており、因幡の情勢が変わったことを示している。

ところで、遠藤董作「鳥取城」の掛け軸には、下の部分に「城主交替年表」が次のとおり書かれている。

天文一四年二月 歟初

永禄 六年マテ 十九年間 布勢山名家長臣輪番

永禄 六年ヨリ

天正 元年マテ 十一年間 武田又五郎高信

天正 元年ヨリ

同 九年マテ 九年間 山名豊国 禅高

天正 九年ヨリ

同 年十月マテ 一年未満 吉川経家 毛利家城代

天正 九年ヨリ

慶長 五年マテ 二十年間 宮部善祥坊 父子

〔以下、略〕

(承前)

布施天神山城に拠る因幡守護の山名久通(「誠通」から改名、「久」は尼子方である証拠)名による、一五四五(天文一四)年四月を最後とする文書は、次のとおりである。

新山定番之儀、鳥取一途〔攻め落とす〕之間、

人数以廿人可致在城之由申候、先以祝着候〔以下略〕

天文十四

卯月十六日

〔山名〕久通〔花押〕

中村伊豆守殿

そして、一年八か月後の一五四六(天文一五)年二月には、次の文書がある。

就今度因州儀、中村伊豆守

別入魂之趣祝着候、近日

〔山名〕豊定可有下向候之間〔以下略〕

十二月五日

〔山名〕宗詮〔花押〕

おそらく『因幡民談記』に基づき作成されたものである
うが、最新の研究成果に基づく城主交替表を見てみたい。

さて、一五六三（永禄六）年、因幡に再び大きな動きが
起こる。次の二つの文書を掲げる。

〔略〕一因州の事、守護殿にて御座候山名源十〔豊数〕
殿与鳥取城主武田又五郎〔高信〕被引分、被及取相候
間、至東伯耆相響、何共笑止候〔以下、略〕

潤十二月廿四日 〔小早川〕隆景〔花押〕

策雲

今度布施天神山取退〔落城〕刻、

為供抽忠儀候、祝着候〔以下、略〕

永禄六

十二月十一日 〔山名〕豊数 判

秋里与四郎殿

一九八三年に発刊の『新修鳥取市史第一巻』には、日置
衆左エ門（先の浜崎論文の末尾に、「この小稿は、県史編
纂室で日置衆左エ門氏と議論を重ねることによって作成し
た。」とある）執筆による次の記述がある。

おそらく、布施天神山城によっていた山名豊数は武
田との争いに敗れて、この年（一五六三（永禄六）年）
因幡の本拠布施天神山城を失ったのであろう。

ところが、先に挙げた冊子『国指定史跡 日本百名城
鳥取城跡』には、次のように記述している。

はじめは因幡山名氏の守護所の出城でしたが、157
3年（天正1）、山名豊国は本拠地を湖山池東岸の天神
山城より移転し、以後、鳥取城は因幡国（鳥取県東部）
の拠点となりました。

既に見たように、一五六三年に布施天神山城は落城して
おり、この記述は間違いということになろう。

小坂博之著『山名豊国』には、次の記述がある。

〔武田〕高信は因幡国人層を組織し、但馬山名氏の支
配から因幡を独立させようとした。いうなれば戦国大名
を目指したのである。

（以下、続く）

八代日記 (二十三)

齊藤 仁昭

(元長崎書店)

十二月某日

熊本市内へ引越しを決めた。年末に荷物を運んでしまう予定だったが、妻が夜中に吐いて体調を崩してしまう。つわりかと思つて第三子はちよつと家計がままならないなあでも三人いるのも楽しいだろうけど妻のノイローゼは酷くなつちやうんじやないか男三人はケンカして面倒だから女の子がいいのかなでもどつちでもいいやなどとどぎまぎしていたら翌日に長男も吐いて発熱。胃腸炎が家庭内で流行りだしたようだ。こういうときは大体自分もかかるのが気がはつていたのか手指消毒がばつちりだったのか回避。しかしついには次男もやられてしまい、出勤中は看病できないので私の実家へと全員を連れていく。親にも移したら悪いが、致し方なし。

仕事の後に引越しの荷物を積んで新居へ運んで看病して、を数日ひとりこなしでいささかつかれた。結局年内には終わりそうもなくなり、社宅を借りているのを少し伸

ばしてもらつた。

十二月某日〜一月某日

恒例の初売り。妙見宮の境内にスペースをお借りし元旦の零時から大福などを販売する。これがハードで、大晦日の15時ごろ出勤したのち、元旦の17時くらいまでのグレイゾン勤務時間。いや完全にアウトだろう。

途中、車の中で仮眠は取れるのだけれど寒さと眠気が合わさつてつらい。しかし、六十代と七十代の上司とストーブを焚いて、おでんをつまみながら冗談を言い合い、年を振り返るのは楽しい。

一月某日

家族の体調も回復し、なんとか引越しを終わらせ新居で寝泊まり開始。通勤時間が往復3時間弱となる…。ちゃんと行けるかな会社。

そして次男が保育園の選考、と言うのかなんと言うのかよくわからないけれど、に漏れて三月いっぱいまでは通えないとの通知がきた。妻の仕事のために引越したのに、妻が面倒を見なければならぬのなら、引越した意味がない。それぞれの親と相談し妻の仕事の際には世話をお願いすることに。親に依存しつぱなしだ。僕が育休を取

ればいいのだろうか。取りづらいたよなあ。

一月某日

ミュージックマガジンで湯浅さんがバンドを紹介してくれたので、氏の出演する「MAYBE」世界快適音楽セレクションで流してくれないかなあと思っていたらほんとうに流れた。配達仕事の際に愛聴している番組だったので感動してしまった。コメントをしてくださっているの自分らの曲が流れてくるのが照れくさかった。

ラジオの力はすごい、その後バンドのネットショップに数十件のご注文をいただく。しばらくは配送作業に勤しんだ。全国いろんな所からの注文がありとてもうれしかった。

一月某日

長崎書店に寄り、予約した「大友克洋全集」の様子を聞く。ほんとうに出るらしいがほんとうだろうか手に取るまで信じられない。出るのなら編集者に感謝せねばなるまい。まずは「童夢」らしい。判型はどのくらいなのだろうか。楽しみだ。

花になる芽 木々の梢

枯葉の上 光の群れ

森の中へ 森の中へ 森の中へ 森の中へ

気をつけろよ 夢に出るぜ

変わりだす絵 また別の絵

なんだここは

ぬかるみに手 足をついて

羽の無い手 振り回して

森の中へ 森の中へ 森の中へ 森の中へ

気をつけろよ 弾け飛ぶぜ

蜘蛛の巣に目 日もかげるぜ

なんだこれは

走らないで 転ばないで

雨が降れば 川になるぜ

森の中へ 森の中へ 森の中へ 森の中へ

気をつけろよ あざになるぜ

咳をすれば 風邪をひくぜ

なんだお前は

(ケバブジョンソン 「森の中へ」 作詞・杉浦真寛)

鱒二追想

秦阜 梅林

(楽人)

序

芝居をやつてゐて最も良かったことの一つに、それきつかけで原作者に就ひて様々な人と語られる倅せがある。山椒魚ならば「井伏鱒二を」語れる…ではなひか！小學生からご高齢の方迄。

井伏鱒二の名を、二三の同僚達は「教科書で読み教へられた」由、僕はさてどうだったらう…何と言つても、幼少期隆盛を極めて居た「ジュニア文庫」と云ふ文化の中、「ドリトル先生」シリーズの翻訳者として…尤も其れを改めて気付かされたのはずっと後年になつて…では有るが。

I

今回山椒魚の音楽を創り奏でる為に、「当然のやうに」

他の作品やら鱒二に就ひて様々な文献をあたり学んだ。

昨今よく云ふ所謂「マイブーム」…

曰く「井伏氏が、文学より絵が好きだったと云うのは、その作品の傾向からみてもウナずける。「風貌、姿勢」その他スケッチ風人物論の無類のうまさや、魚や鳥や生き物の描写の的確さ、豊かさをみても、氏に写生の才能のあることはすぐわかる。特に初期の短編は、絵を文字でつづつたものと言える位だ(中略)百姓が自分の收穫を掌に受け眺めるように、仕事や作事の成果は一個の現物でないといふ感じがすまないという、いわば即物的なりアリズムが氏の本質の根本にありそうな気がする。自分の眼で見て確めたものだけしか信じないという現物主義が、氏の心底には多分よほど頑固に根を張っている」―安岡章太郎氏

曰く「井伏氏はあり余るほど豊かな才能と資質に恵まれながら、文壇的にはきわめて不遇であつた。処女作「山椒魚」が「幽閉」という題で同人誌「世紀」(大正12年)に発表された時も、ある評論家から「古臭い」と云う意味の短評、新聞の文芸欄で片づけられただけであつた…しかし当時青森中一年生であつた太宰治がこれを読んで「坐つておれなかつたくらいに興奮した…私は、埋もれたる無名不遇の天才を発見したと思つて興奮した」と書いている。」

II

「井伏文学が正当な評価を受けたのは昭和6年2月号の「改造」に発表された「丹下氏邸」について小林秀雄氏の評論が初めてであった。「彼の文章は決して平明で素朴でもありません。大変複雑で、意識的に隅々まで構成されているものです。若い作家のうちでは文字の配置について最も心を労しているものの一人です。彼は文章には通達しております。瑣細な言葉を光らせる術も、どぎつい色を暈す術も、見事に体得しています。」と小林氏は書いている」以上——河盛好蔵氏「井伏鱒二人と文学」より 等々

III

河盛氏は更に「早稲田を退学してからも井伏氏は大先輩を離れなかった…(中略)本人曰く「私は青春と言う青春をこの辺のどぶの中に棄ててしまった。いまでもこの町の裏通りを歩いていると、見覚えのある穢いどぶの中にはまだ自分の青春のかけらが落ちているような気持ちがある」等ペース溢る〃筆致で続けてゐる。

IV

そんな日本のカルチャータンに永く棲った鱒二が、(中央集権絶対主義真つ盛りの)此の時代に山椒魚やジョン万、…そして黒い雨…と中四国に絶へず特別な拘りを持ち続け、クールベにも喩へられやうリアリズムの筆に託し、徒然に綴った台詞が「山椒魚」ではふんだんに語られる。其の生き生きとした言葉に次世代、令和の若者達は何をきり、何を感じるのだらう?…芝居の舞台が夢を運んで呉れるのは嬉しいことだ。

2022.01.03 高知於て

【今回の一冊】 井伏鱒二「ジョン万次郎漂流記」(新潮文庫刊)

【今回の一枚】 C.ライネッケ 「3つの幻想小品集」
op. 43ほか G.ロゼVla Fr.R.ドゥシャープルpt
(rec. 1994)



イラスト 秦阜梅林

ホールケーキにて

森本 龍哉

(鳥取大学地域学部4回生)

汽車に揺られ、降り積もった雪を車窓越しに眺めていると、巨大なホールケーキの上にいるような心地になる。白くまるいホールケーキの上をぐるぐるまわっているイメージ。白い生クリームの上に並ぶ家や車を砂糖菓子にたとえる。あたたかい車内であうとうとしてしまう朝には、そんな甘さがある。

でも、足もとに降り積もった雪にスコップをザクツとさしこむとき、それはぜんぜん生クリームなんかじゃない。防寒着の上下に、長靴を履く。不織布マスクと手袋を装着し、キャップ帽をかぶる。スコップを降り積もった雪にさしこみ、すくいあげ、隅に集めていく。近所の豊饒とした人が軽トラックでやってきて、その荷台に雪を積ませてもらう。荷台に積み上がっていくそれは生クリームというよ

り、かき氷。軽トラックを2往復してもらったところで、その人は昼下がりに帰っていった。

私はスコップの作業に飽き、隅に集めてできた雪の盛り上がり、背をあずけ、手もとの雪をつかんで雪玉をつくる。それを雪がのっぺりと降り積もった屋根の上へ投げる。私と前方の屋根のあいだには、野球場にある選手のベンチがひとつは確実におさまるくらいの距離がある。投げるたびに、ぼつぼつとまるい模様が屋根にできていった。私は右肩が痛くなり投げるのをやめた。背中や腰、脚と腕にくわえて、痛む必要のない肩にまでダメージを負う。それでも雪かきはずぶく。暑さを感じ、汗をかいている。いつもより水が冷たくておいしい。水を飲んで、という感じがしみこんでくる。

雪かきをしていると、幸か不幸か室内で考えなければならぬと思っていたことがうまく考えられない。そうだが、あのことについて考えなければならぬんだ、と思うのに、やっぱり何度やってもいつのまにか考えられなくなっている。だからほとんど何も考えずに作業をするが、降り積もった雪を隅の盛り上がり、移動させていると、たまにその上にドドドツと、あるいはドスツと屋根から雪が落下してくる。それをサインに、にわかになんか考えることがはじまることになる。やがて雪がなくなっていく、もとのアス

フアルトの地面が見えてくると、雪と一緒に濡れた土や石、ユケなんかがスコップに付着するようになる。私は給食の白いごはんのことを思う。

おいしそうな香りをまとって白衣姿の給食当番が教室に帰ってくると、いちはやく白いごはんをすくいにいく生徒が何人かいた。給食当番にしゃもじを借り、教室の人数分のごはんが入った大きな容器の前に立つ。のっぺりとした白いごはんにしゃもじを入れる、ゆっくりと。そしてその白い表面だけをうつつすらと器用にすくい、満足げに自分の茶碗に盛りつけていた。それが終わったあとで、給食当番はしゃもじを使って白いごはんをまんべんなく混ぜていく。そのとき、四隅や底でぐちよぐちよと水分を多く含みすぎている米粒たちが姿をあらわす。表面も底も隅もなくなくなり、つぎつぎとほかの生徒たちのごはんが盛られていった。

学校のグラウンドには積もりたての雪。それを見て雪だるまをつくったり、かまくらをつくったり、雪合戦をした。でも徐々にとけていき、グラウンドの土と混ざりはじめる。水たまりもあらわれる。教室のストープのまわりに集まる時間ばかりが増えていく。室外では、とけていく雪が屋根からべちゃべちゃと地面に弾けるように落下していく。そうなったとき、もうほとんど誰も、雪への興味をうしなっている。やがてその音も聞こえなくなってしまう。

そのくりかえし。

そうしてやってくる春という季節をあまり好きになれない。2月は少しずつ春の空気みたいなものが感じられるようになってくる時期。それに備えなければならぬ。そう思うのに、具体的に何をどうすればいいのか、わからない。毎年そうだ。わからないままにやってくる、とおりすぎていく。最近、汽車には乗っていない。

一緒にいたいような、いたくないような

『コロナ・アンビバレンスの憂鬱』に寄せて

三浦 永理

(青翔開智中学校教員)

一緒にいる意味って何なのだろう。

コロナ禍は「一緒にいること」ってこんなにも大切でしたよね」とは伝えてくるが、私達は腰を据えて、本当にそのことを考えることをなおざりにしてしまっている。

当たり前に一緒にいない日々が続いているが、私にとつては奇しくも初めてのひとり暮らしを始めた時と重なってしまった。コロナの時代にあつて、ひとりで暮らすことは、感染した場合の孤立化にもつながるが、感染経路を断つことができるとも言える。感染するのではないかとという恐れがたたれる家という環境の中で、友人に会うには電話するしかない。いや、やはり通話にしかすぎないともいう。どれだけ話していても、一緒にの空間で泣いたり笑ったりしていた頃とは何かが違うのだ。そんなことは「不要不急の外出」になつてしまつたけれど。

それでもコロナで勉強会などがオンラインになったことで、地方にいる私でも勉強会に参加できたり、交通費をかける必要がなくなり、恩恵にも預かった。オンラインが当たり前になつてしまったからこそ、友人達とも簡単に話せるようになった。私が遠くにいるからではなく、オンラインでしか人と話す方法はなかったから。

そうやって「通話」し続けている不思議な女友達がいる。向こうも一人暮らしをしているのだが、容赦なく勝手に電話をかけてくる。電話に出ないと勝手に怒ってくる。と言つても、予告なしにかけてくるから、出られなくて当たり前だともいうのだけれど。

仕事柄、朝が早い私と、夜が遅い彼女とでは、意識がはつきりしている時間が完全に真逆だ。こつちが寝ようとしている頃に電話をかける彼女。朝が弱い彼女に「お願い、起こして」と言われて朝電話する私。

基本的に彼女の方がものすごく落ち込んでいたり、ものすごく元気だったり、私は振り回され続けている。のだが、耳元で突然歌われたりするの嫌いじゃない。なんだかんだ似ているところも多いので、きちんと議論もできる。全て電話越しだけれど。

斎藤環氏が著した本で『コロナ・アンビバレンスの憂鬱』を読んだ。

斎藤氏は、コロナに対するアンビバレントな感情について論じていく。早く終わって欲しいけれども、リモートワークがなくなっていくたり、通勤電車に戻らなければいけないことへの抵抗。

そして、斎藤氏が語るのには、コロナの日常が忘れられることへの警鐘だ。スペイン風邪の記憶が忘れ去られていったように、コロナのことも忘却されていく。それは、コロナの記憶が適切に外傷化されない可能性があるからだ。トラウマの観点から切り込んでいく。忘れられた結果、コロナが過ぎ去った後、世界はそれほどまでに変わらないかもしれないとも語る。

コロナ禍という異常事態。緊急事態だからこそ、国家が人流の抑制に乗り出し、多くの人がそれを当たり前に感じた。最初の頃、それに感じた違和感や抵抗感は、コロナと共にある時代が二年目となった現在、もはや多くの人が忘れていく感情ではないだろうか。

そして、私達はコロナ禍によって気付かされた共にあることの価値、オンラインの価値を本当に言語化できているのだろうか。斎藤氏はリアルな場で共にいることが、臨場性をもたらすものであり、それが時には暴力性を伴うとい

うことをひきこもり研究の観点から提言する。

確かに「〇〇な場面ならオンラインでもいい」など、ハウツーの言語化は増えているかもしれない。しかし、それをきちんと抽象的に言葉にできているのか。そう考えさせられる一冊であった。

私は電話越しの彼女とは一緒に暮らしても楽しいのではないかとも思っている。けれど、一方で私たちの関係って、距離があるから成立しているのかもしれないと頭をよぎるようになった。

もし、お互いに一緒に暮らしていれば、彼女の暴力的なまでの存在に私は圧倒されてしまうかもしれない。振り回されたとしても私たちには何百キロも距離がある。

だから私は彼女と暮らせない……と言いたいのではない。もし、一緒にいたら、お互いの背中をさすって、一緒にいるだけという行為ができる。ただ隣にいるだけ。そんな空気みたいなことは、やはり同じ場所にはないとできない。本当は手と手を握るだけのことをしたい。

同じ場所にいることは、そんな曖昧な白黒つけない関係性をも成立させるのだということを、ひとまず私の結論としたい。

巻きものの冬

ド
ラ
メ
リ
ア

(座敷わらし)



冬は巻きものに凝る。ジテツ（自転車通勤）は防寒が命だ。雪の舞う朝は風がおそろしく冷たい。ファッション雑誌や通販のカタログで見られるようなコートの前を全開にしたおしゃやかなしはとでもできない。ポタン・ファスナーは首元まできっちり留めるし、雨雪除けにフードもかぶる。飾りじゃないのよフードは。

とはいっても「ザ・自転車通勤！」な本気装備で身を固めるところまでは諸々の理由でしかねるので、首元にはとにかくマフラー、が冬の標準装備になっている。あまり高級なものを持ち合わせていないが、その日の服装や気分に合わせてるように色味や柄を変えて数枚揃えている。ただし残念なことに首元が刺激に弱く、マフラーもタートルネックセーターもチクチク感に悩まされることが多い。紫と白の組み合わせに一目惚れして買ったフランス製のネツプ調マフラーは、チクチクに耐えて数回着用したもののその後お蔵入りとなった。

そんなわたしが最近よく付けている室内専用のネツクウオーマーがある。（暖房をあまり付けられないので室内も寒いのだ）首元にぴったり密着するので暖かさはもちろんのこと、天然素材の肌触りはしごく柔らかで不快な刺激もない。

もちろん何事もそうであるように問題も少々ある。その形態から寝ているときか座っているときしか付けられないことと、この天然ネツクウオーマーを装着している間は何かできないこと。それから、時々爪が食い込んで痛いこと。そもそも、なぜ膝の上ではなく首にしがみつきたいのかにやあ。暖まっているのはどっちなのかニヤア。



・編集後記：

最近耳まですっぽり隠れる帽子をかぶっているの、帽子に眼鏡にマスクとほとんど変装状態。知人に会釈してもわからない様子：紳士のように帽子を取って挨拶すべきか迷う日々。

ド
ラ
メ
リ
ア (編集長)

一月に三砂慶明さんの『千年の読書』が誠文堂新光社から刊行。第3章「新しい働き方を探す旅」で、『伝えたいこと』（定有堂書店刊）に触れられていて、読者からの問い合わせが増えてます。うれしいことです。 奈良敏行（発行人）